

夢の消滅

大原由記子　え・南　和好

6

一央は一枚の幸福な絵を見るように実桜と冴子を覗めた。冬の薄い日の光がブランード越しに二人の女の裸体に縞をつけている。女の産毛を光はこそばしてい。

「私たちどうしてればいいの」

「お好きなように」

一央は膚色の絵具に銀色と白をませながら言う。

冴子は実桜の体をまさぐりながら、ちらりと一央を盗み見る。ふふっと鼻にかける笑い声が一央の耳に残る。

冴子の手がスローモーションの画像のように、実桜の肉についてない体をはう。間伸びしたような夏の午後のように

に時はゆっくりと流れていった。実桜の手が冴子の背中に回る。冴子の膚の感触、咄嗟に一央のなかに一つの感触

をよみがえらせ、息苦しくする。冴子の体の匂い。絵筆を機械的に動かす。もじろけるような感情を押し殺し

ているものがあるとすれば、それは冴子の瞳、火照つて

る体の熱さからほど遠い冷たく輝やく瞳、過去の一点だけを見抜いてるような目差しが、冷静さを一央に強いる。

そしてあの瞳の輝きは一央にも共通している。同じ暗さと欲望を欲していることを一央は知っている。

「早く仕上げてこっちへいらっしゃいよ」
冴子は実桜の髪の間から顔を出す。
「そんなに簡単には描き上がらないよ」

実桜は冴子の胸に顔をうずめ、眠むそうな目で一央を見つめている。甘い蜜を嘗めて満腹した子供のように、うつろな視線で一央の筆の動きを追っている。一央はこそばゆいような目差しを手に感じる。目には見えぬ蜘蛛の糸のように、実桜の視線がねつちよりと一央に絡まる、早くおいでよ。

「ああ、わかったよ」

一央はTシャツを脱ぎすてるとベッドにとびのつた。

「油っぽいのね」

実桜は一央の首に絡まつてくる。

「危ないよ」

一央と実桜は絡まつたまま冴子の上に倒れる。

何か温かな感触がおかしくてぶつかった痛みは消え、笑いが三人を包んでいた。実桜は冴子の腹の上で、冴子

は一央の腰の上でしばらく笑いをかみしめていた。

冬の午後は短かくほんのつかの間の明るさとあたたかいのに、その日に限ってたらりとした明るさとあたたかみを夕方近くまで固持していた。

「インディアンサマーって言うんだよね、こんな日のこ

と」
一央はぼつりと言った。

「そんなに簡単には描き上がらないよ」



冴子は眠りはじめた一央に寄り添い煙草をくゆらせて

いた。煙草が欲しい訳でもなかつたが、もともと広がる煙の軽やかさを羨望の目で見ていた。実桜が寝付いてからずつと冴子を膚にしている実桜への執着が重く冴子にのしかかっていたから、煙の自由な広がりをうらやましくも味けなくも思えていた。

実桜の体を薄く包んでいた香りが熱のために甘酢っぽく感じられてから、実桜の体はますます植物の匂いを発しながら冴子を惹きつけた。萎えていく生命を間近で見るという楽しみは悪に近いからこそ、想像以上のよろこびと悲しみをほこんでくる。

「まだ眠れないのか」

一央はだるそうな声で寝返りをうつ。

「病人のMを一人にしてきたのが気になるんだろう」

「それはあなたじやないの」

一央はシャツをはおつて起き上がる素振りをしたが、冴子はそれを止めた。起き上がりスタンドの灯でもつけられたらまたまらなく思えた。

「そんなにMが大切なら、どうしていつしょにいてやらない」

「眠気もふつとびそうな迫力じゃないか」

一央は冴子の手を払ってスタンドの灯をつけた。

「ぼくはあなたたちがどんなに深い結びつきなのかほどんど知らないし、知ろうとも思わない。ただあなたたちを見続けることがぼくのスタイルだから崩そうとも思わない。卑怯だと言われても仕方ないさ」

一央はいも虫のようになるまつて煙だけ吐いている。

「わかってるわよ」

「だからぼくに泣き事を言うのはよせ。Mを傷つけることがあなたの愛だと言うのはよせ。Mを傷つけるあなたたちのゲームに立ち入るつもりはない。しかしもしほくに必要なことがあれば手伝つてあげてもいい。それほくの愛情であり、あなたたちへの復讐でもある」

「Mを連れ去つて欲しいわ」「いいだろ。簡単なことだ」

一央は灯を消して毛布にもぐり込んだ。また闇が広がり冴子の煙だけが白く浮いた。一央は背を向けると寝たふりをはじめた。冴子はがつしりした背中に抱きつきもう一度抱かれたかった。不思議なくらい冴子の体には一度のいていくもどかしさが手の中にあつた。

冴子は不満気にシガレットケースに手を伸ばした。もうしばらくすると一央のかすかな寝息さえ聞こえそうな気がした。しかしすぐには一央が眠らないことはあきらかだった。冴子の気分がほぐれない以上一央にも何らかのしこりが残り、一央の不機嫌さが又冴子の眠りを脅かしていた。不機嫌な感情を共有するとき二人が一番近い距離にいることも確かだつた。体の重なり以上の身近かな位置で不消化な愛を噛みくだいていた。

「あなたは決して誰も愛せないわよ」

「あなたたって人のことは言えないさ」

一央の声は眠気を帯びていつも以上に低く響いていた。「でも私はゲームのくりかえしで本物になっていく感情を見いだせるわ。言葉が気分を作っていく。虚構だつて本物になることもあるのよ」

「多分あなたの言う通りだろう。しかしほくはあなたがゲームを始めたから、それにのつた。Mにも興味を持った。しかしMとてもあなたたという存在がなかつたら惹かれやしない。今だつてあなたたちを見てる分は楽しいさ。しかしほくはSやMとしてあなたたちを見てるつもりはない。まして冴子は冴子、ぼくからしたらいつも生身の女だ。だからあなたたちの愛が本物になろうとぼくとは関係ない。あなたへのぼくの気持は変わらない。それがぼくの告白だ」

冴子は黙つて煙を吐いた。一央はいつも曖昧な笑をかけてくる。不明瞭さに気持をすくわれて一央のなかにころびそうになる。

「あなたといっしょに生きることはできても、死ぬことはできないわ」

「それで十分さ」

一央はうつらうつらとした眠りの海に徐々に体がつかりはじめていた。冴子の体の匂いが軽い痛みのように皮膚の表面に残っていた。どんな言葉で撫でようとも痛みは消えそうもなかつた。そんな痛みを抱いて眠らなくてはいけない自分がなきなかつた。しかし冴子の匂いを忘れるには、二人の曖昧な関係は長すぎた。その間に冴子はあるゆる手段で一央の感情を刺激し飽きた。

冴子の寝息が聞こえていた。感情をぶつけるとキャッチボールに飽きた子供のようにぐつたりと眠る冴子を見ると、一央は安らぎと疲労感をいっしょに感じた。そしてどこまでもただよう暗い眠りの海でぶかぶかと浮いている自分たちの姿を想像した。一人は冴子であることは確かだつた。しかし冴子と重なり合つて波間をただよつているのは一央ではなく実桜のようだつた。もしこの



~~~~~

広い海から一人しか救えないものとしたら……。

一央は呪文のように唱えながら眠りへと落ちこんでいた。今冴子と眠りを共有すること以外はすべて闇の底に沈んでいた。

実桜はぶるんと身震いしてベッドにもぐり込んだ。熱っぽいだるさが身体の奥から醸醉し、甘くすっぱいような悪寒が連続してやって来る。——これを飲んだら少しは楽になるはずよ——

冴子の粉薬を一央が作ったほうれん草のポタージュスープに流し込む。グリーンの液体に薬は同化せずに、ガラスの破片のように表面できらきら輝いている。

実桜はスプレーで乱暴にかき回して抄つた。薬なのかほうれん草なのか、苦味がちくちくと舌に絡まる。苦味が少し甘く感じられるのは、でき上がる前に一央が生クリームをたらすことを見失なかつたのだろう。しかし三口目を口にしたとき激しく咳込んでスープをおとしてしまつた。ベッドからカーベットへたらりとグリーンの染みがついた。

「どうしたんだ」

一央が白いサロンエプロンをして立っていた。

実桜はおかしさがこみ上がつてきた。

「似合うじゃない」「病人らしく大人しくしてたらどうだ。憎まれ口をきかずには」

一央は冴子のネグリジェに着がえさせ、濡れた実桜のベッドから冴子のベッドまで実桜を抱いて運んだ。

「この部屋によく入るの」「まあね」「一央は意味もなく笑つた。

「さつきあなたがまだ眠つているときだが、窓の外で男の子がうろうろしてたよ。あなたの知り合いじゃないかな」

「どんな人」

「ぼくと同じくらいの背の高さ、同じような肉付き」

「それに感じがあなたと似てたんじゃない」

「それは自分ではわからないが、あなたと何か関係がある男だとすぐわかった」

「そんな男がこんな山奥まであなたを捜しにくるのかい。まるであなたは魔女だな。はるか昔の人間までたぐりよせるのだから」

「彼がSの恋人だと言つてもあなたは嫉妬しないの」「はるか昔のことなのだろう」

「今も続いてるわ」「あなたたちといつしょにいると大抵のことは驚かなくなる。そんなこともあるだろってね」

「じゃあ、Sと私ではどちらが好き」

「わからないよ。あなたたちはまったく異質の個性を持つた一卵性双生児みたいな関係だから、ぼくには区別がつかないときがある。もつともあなたたちにすれば、ぼくの存在なんか空気のようなもので互いの愛を認め観察する目を持つた男なら、ぼくでなくとも誰でもよかつたかもしれない。きっと窓の外にいた男はぼくの役ができなかつたのさ。あなたたちのどちらかを本気で愛してしまつた。ゲームがゲームでなくなつた。そうじゃないの」「よくお見透しね」

「眠つた方がいいよ」

一央は毛布を実桜の肩までかけた。

「実桜、ぼくは窓の外であなたを見てた男ほどやさしくも冴子ほども冷たくできない男だよ」

「実桜つて呼ばれたのははじめてね」「実桜はふふっと笑つて毛布をすっぽりかぶつた。(つづく)

## ●神戸つ子トラベルコーナー

★'79カナダ冒険学校13日間  
この夏、夏に生きる大自然の中、カナディアンロッキーのふもとカナダ・カルガリー、Y.M.C.Aの広大なマナスカキャンプグランで、自然のすべてを体でおぼえよう。

日程／7月25日～8月6日

費用／¥33,800(12才未満)

大阪→成田→バンクーバー→カルガリー→マナスカセンター→オカガバンレイク→バンクーバー→成田→大阪

お問合せ・お申込は阪急交通社三富営業所 331-3555

★ブリティッシュ・コロンビア大  
学夏期カナダ・ホームステイ50日

日程／7月14日～8月29日

費用／¥48,500(6月本まで)

費用／¥13,800(6月本まで)

ります。食事付。

★ハワイツアー4日間

出発日／毎日出発(日、月除く、  
6月本まで)

費用／¥13,800(6月本まで)

ポリネシアンダンス



ポリネシアンダンス

24日、8月7日出発  
お問合せ・お申込は日本旅行三  
宮営業所 324-1188  
★セブ島・マニラ4日間(A)  
遠浅の海・白い砂浜、時をわすれ  
てしまいそうなセブ島へ……。  
日程／7月30日～8月4日  
費用／¥98,000(9月23日)



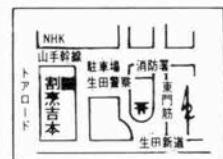
マニラ湾の夕陽

24日、8月7日出発  
お問合せ・お申込は日本旅行三  
宮営業所 324-1188  
★マニラ4日間(B)  
世界最高といわれるマニラ湾の夕  
陽をながめながら……。  
日程／Aコースと同じ  
費用／¥73,500  
A、Bともにタガタイとナヨン  
フィリピン観光(¥8,000)  
モンテンルバ観光とバグサンハン  
の川下り(¥9,000)のオプ  
ショナルツアー付  
お問合せ・お申込は灘神戸生活  
協同組合観光部(東灘区住吉町中  
島434-1) 851-1700  
★クルーザーでまわる未知の国  
スザン・イエメン・南イエメン  
ヨルダンとエジプトの旅  
今年度末に紅海で珍らしいクル  
ーズを企画。船はエジプティキラ  
インのネブチューンを予定。普通  
のツアードは入国不可能な国々を  
訪れますので大変な魅力です。

大阪→カイロ→エジプト→トス  
ーダン→カイロ→エジプト→ボートス  
ーダン→アデン→ホダイダ→アフ  
バサファガ→アスワン→カイロ  
→大阪

お問合せ・お申込はドットウェル

トラベルサービス(箕面区磯上通  
明治生命ビル)  
251-0021



# 割烹 まき 本

●昼間は京風弁当もあります  
午前11時30分～午後10時 第3日曜のみ定休  
生田警察署西口前  
☎331-5817, 392-2020



# 自由と正義の水たまり

最終回

文保西小・え竜

ソフィイは尔の手をとつたまま、白い顎で夫と子供の方を示し、

「仲が良いのよ」と彼らの方へ、尔を誘つた。

子供は、側に居る血の繋つた父親には目もくれず、盛んに金魚を追い廻していた。ちっちゃな手がガラス壁を敲くと、その掌よりも大きい赤い蘭虫や琉金が、蝶のように舞いあがる。尔は、放心したようにその光景を見詰めていた。ふと見せた敏捷そうな黒い瞳に黒い髪。尔はその子を抱きあげたい衝動を覚えたが、すぐそうしてよいものかどうか躊躇してしまう。

「あなた、ここではゆっくり話も出来ないから、静かな処へ行きましょ」

ソフィイの言葉に、男が子供を抱きあげ、みんなは地下の茶房へ下りて行った。尔は最後を歩きながら、いよいよ話が本題に入るだろうと云う緊張感を覚えた。

ソフィイと尔が並んで座り、向いあつて彼女の夫と子供が座つた。と言つても、彼女の夫が席を勧めてくれなかつたら、尔は誰と並んで座ればよいのか、恐らく決めかねていたであろう。

「坊や、名前は何つて言つたつけ」

「ジヨウジ」

子供は黒い瞳を更に大きく見開いて、彼を見詰めた。

彼は目を逸せた。

尔は日本語でなら、譲二とか城治とか字をあてればよいと思い、やはり何處かに彼自身の幼い頃の面影を見るような気がしながらも、この日本語を全く解せぬ子を前に、どうしてもためらい勝ちになってしまつた。

尔は向い合つて座るソフィイの夫に、何か改まつて言わねばなるまいと思つた。仮え、少しの沈黙にも、この男の前では辛抱出来そうになかった。

「実は、ソフィイやあなたの奥さんから既に聞いているかも知れないけれど、私と彼女とは暫く一緒に暮してゐた。もちろん私は、真剣に彼女を愛してはいたし、結婚するつもりでいた。信じて欲しい。決して彼女を玩ぶとか、そんなつもりは全然なかつた……」

男は真剣な顔になつた。すると悪意のある表情ではないが、少し恐い顔付になつた。

「もう何も言わなくて好い。そんな事はこれからも決して言う必要はない」

尔は惨めな自分を感じ、再びシュガーポットや灰皿を触り始めた吾が児を見た。多少落ち着きに欠けるが、いじけた处がない。

「成程、この子はお前の子だ。しかし法律的には私の子だ。一人前になる迄は、私達にその扶養義務がある。もしこの子が成人して、その時日本の国に住みたいと思

うなことを言  
う。

ソフィイは大仰  
に驚いて見せ、  
あなた方はまる  
で昔からの親友  
みたいだと言  
い、さらに私は  
大変幸せだと練  
り返した。

尔はこの時、

この男は全く自  
分とは人間が違  
う、そしてソフ  
ィはそれを知つ  
ていたのだと思  
った。

尔は急に深い  
疲れを覚えた。

ソフィイが尔  
に、彼の家族、  
妻と子供のこと

を訊ね、連れて来れば良かつたのにと言つた。

彼女の夫は尔に、仕事について訊ね、尔が明日の観光  
案内の約束をして、後は締める方面に話題が及んだ。

男は、ソフィイに会う前、空軍に居たと話した。そこを

辞めた経緯は、仲の良かった同僚の一人が、練習飛行中  
ジェット機もろとも海に墜落して死ぬと云う事故があつ  
た。その時、司令室に居た男は、友達の（駄目だ！）と  
云う最後の絶叫を聽いた。それきり応答はなかった。そ

の一言が耳を離れなくて、彼は軍を退き故郷のオレゴン  
州に帰つた。そこで、夏休暇で帰省していたソフィイと会  
なつて

「お前はソフィイとの間に子供を作つた。俺も負けずに  
頑張って子供を作るからな」と、まるで野菜でも作るよ  
うなこと



えば日本に住めばよいし、アメリカに住むつもりならば  
アメリカに住めばよい。それはこの子の人間としての自  
由だ。その時に本人が決めればよいことなのだ。今も言  
つたように、この子は現在は、私の子だ」

尔は、自分の煮え切らぬ態度が、どうやらこの男に誤  
解を与えてしまつたらしいと考えながら、

「あなたの言うことは間違つてはいない。まさにその  
通りだと思う」

尔の言葉にすぐ笑顔を取り戻した男は、辟けた調子に

「お前はソフィイとの間に子供を作つた。俺も負けずに  
頑張って子供を作るからな」と、まるで野菜でも作るよ  
うなこと

で結婚したのかどうか尋ねてみたい欲求を中心のどこかに抱きながら、同時にこの男の前にそんな自分を酷く恥じていたのだった。それに、もうどうでもよい事であった。

話が途切れた時、ソフィーの夫が、冗談を言つているとと思われない顔で言つた。

「今夜ホテルに泊つて行かないか。もちろん一度帰つて、夜出直して来てもかまわない。私は一晩位息子と別の部屋をとつてもよいし、妻もあなたに会うことを本当に楽しみにしていたものだから」

尔はその言葉の意味が一瞬呑み込めず、男の顔をまじまじと見詰めていた。

その間の抜けた尔の顔をソフィーが受け取り、微笑しながら

「駄目よ。チカは儒教の精神だから——。それに彼の奥さん姫唄深いかも知れないしね」

「からかわないで下さいよ」

男の頬に笑窪が出来かかり、出来ずに消えた。みずいろの深い瞳の底に、尔は自分の顔が映っているような気がした。その顔がとても嫌な感じだった。

男は時計を見ながら

「それじゃ、もう余り時間がないから明日また会うことにしてはどうかね。私達は午後の定期観光バスに乗ることになつていいから」

その言葉に、ソフィーが子供を目で捜している。子供は茶房の中を走り廻つてゐたが、今は絨毯の上を這つてテレビの下に潜り込んで居る。

「勇敢な男だ。彼は何物にも負けない立派な男に育つてくれるだろう」

男の頬にまた笑窪が浮かんでいる。尔はその横顔が、ちょっと寂し気に見え、なぜかしら男が自分は友達の最後の叫びに負けた臆病な男だと語つているような気がして、胸に熱いものを覚えた。尔はこの男を凄く好きになり、その分だけ自分を惨めに感じた。この男なら仮え人種は違つても、少くとも食い物のことで女と諍いをする

ようなことはなかつたろうと思えたからである。  
尔はふと子供にやるために買っておいたレコードを忘れて来たことに気付いた。

「プレゼントのレコードを家に置いて来てしまつたので、明日持つてくる」

尔は腰を伸ばしながら言つた。男が子供を連れに行き、ソフィーが席を立つのに合わせて。

「あら、あなた私の趣味まで憶えていて下さったのね、嬉しいわ。私も彼と同じようになつた愛しててよ」  
ソフィーはまた尔の手をとつた。ふつくらとして柔らかい掌、それは尔にかかる白い頬の感触を想起させるに充分だつた。

それを振り払うように

「いや子供のさ、童謡なんだ」と、これは言わない方が良かつたかなと思ひながら、

「トンボの目が水色なのは、青い空を翔んだからと云う、有名な日本の童謡なんだ」

尔は、照れ隠しのようなくロス貼りの天井を見上げた。彼女はあなたへではなく子供への贈物だと言われても別に脹れもしないで

「すてきね。でも、ジョウジの眼は、あなたのようには黒色だわよ」

尔はその言葉に、ぎよとした。

子供を抱いて側に來ていたソフィーの夫が、笑いながら「何を吃驚しているんだね。それは至極自然なことではないか」

ソフィーも夫の笑いに合わせ声を立てて、三人と子供は茶房を出たが、尔だけは笑えなかつた。

ホテルの正面玄関に着いて観光バスに彼等を見送つた尔は、そのまま家と云うには氣の引ける文化住宅に帰ることにした。

道々、桜の花びらが、かそかな風に散つていた。  
尔は歩きながら、あの男のように自由でありたい、人間としてもつと自然に人生を眺められたらどんなにいい

だろう、と思った。同時に、あの男のように見事に、所謂自然に生きることが出来ない限り、所詮自分は侮辱やら憎しみやらの、その他いっぱいの不自然な感情を抱き続けて、この世を渡つて行くしかないのだとも思った。

くしか仕方

がない。そ

れが一等似

合つた脚が

地に着いた

ぼく自身の

生き方（こ

れまで一度

だってこれ

でよいのだ

とは思つた

ことのな

い）人生な

のだと、尔

は思つた。

更には今

の生活を大

切にしたい

とさえ殊勝

にもこの洋

行帰りの若

者は、考え

ていたので

ある。なま  
じつかな厳しさとか云う感傷のもとに、現在の生活を破壊することなど、鼻をかむよりも容易いことのように思える。尔はソフィーに心魅かれ、その感情は極く自然なものであつたが、なんとか妻と仲なおりしてやつて行くこ

とを第一義に、部屋に帰つて來たのである。旅行代理店のあの社長さんが、今しがた目撃した事實を、誇張して妻に語るに相違ないと推測しながら――。

部屋は一時の他出にしては、妙な具合に片付過ぎてゐた。何かメモでもないかと捜したが、それも見当らなかつた。

今度だけはちよつと厄介なことになるかも知れないと思ひ、

尔は部屋にごろ寝して暫くほん

やりしていた。

生きて行くには

一日は余りにも

様々な事が有り

過ぎる。まだ昼下りなのかと、

尔は思つた。

乳臭い赤児の匂いの残つている部屋が、妙に薄ら寒いのに気付いた尔は、立ち上ると、部屋の隅にある机の前に座つた。そこには安物のプレーヤーが置い

てあり、その脇にドーナツ盤のレコードが二枚。彼は便箋を取り出し、この童謡の英訳を贈物に付けるつもりでペンを執つた。ところが高ぶつた彼の神経が、当初考えもしなかつた文面を彼に書かせ始めていた。



どうか、あなたの子供が、物心ついて、彼自身の髪や瞳の色から、私のことを尋ねる日がやって来たら、その時、私のことを臆病な唾棄すべき男であったと、そして今はもうこの世には居ないのであると、きっと話してやつて頂きたいのです。

ここまで書いた尔は、ふとペンを投げ出すと、頭を抱えて凝然としていた。それから顔をあげ、俺は何をしているんだろうと口に出して言い、こんな事（それは義父のもとでの子供の生活を完璧にしたいと願う実の父のずいぶん浪花節的な行為ではあつたが）をする必要も権利もなかつたんだと、尔は思った。

あの男の言つたように、成人した時あの子がアメリカでソフィー達と暮すのも、日本に来て住むのも、それは将来あの子自身が決めれば好い、あの子の自由だ。但し、将来あの子が日本に来て、尔自身によつて拒絶されるような事だけは、そんな三文小説のお涙ちようだいみたいな事だけは決してあってはならないのだと、尔は思つた。それがあの男の云う至極自然なことであろう。そういうえ、ジョウジは現在あの男とソフィーの子供なのだつた。

尔にとつて自然とか、自由と云うものは、本当に寂しく芯の疲れるものであつた。尔は書いたばかりの便箋を破り捨て、さらにレコードの包装紙を破いて一枚を取り出すと、プレーヤーに載せた。レコードに描かれた二匹のトンボが、ゆっくり回転盤の上を廻り始め、すぐ見えなくなつた。

尔は煙草に火をつける。

自分の子ではないあの子が、オレゴン州の広い空の下で、この曲を開くのだ。

視線が山に阻まれることのない国、何處迄も黄色い草原の続く広大な土地で、ジョウジは自由に生き続けるだろう。そこにも季節が来たらトンボが空を翔ぶだろう。乾いた草の中の道を歩いた思い出。目ばかり大きい、何かを見てしまつたトンボ。

嗚呼、トンボの目から涙が落ちる。

（あなたの心は、ナイテ居ルノネ）

廊下でそれ違つた髪の長い大柄な女子学生が、たどたどしい日本語で、話しかけてきた。日本語講座の教室に手伝いに行った時、強く印象に残つたノウ・スリーブの白い腕が、抜けるように美しい女である。

暑い夏。希望と崩壊が同時に襲つて来てもちつとも不思議でないような四年前の、あの暑い夏。凡てはそこから始まつた。いま日本から届いたばかりの父の死を告げる電報を、掌にしつかり握りつぶしたまま、もうこれからは、何をやつても誰も悲しんでくれる者が居なくなつたのだ、と思つた。

明るく広い大学の廊下を、ソフィーと名のつた女と肩を並べて歩きながら。

（華）

## □ 蒼 竜一

（作家）

きややかな感じで、人あたりが好く、神戸でも女性に人気がある。そのせいいかどうか、最近、東大寺学園を辞め、奈良文化女子短期大学に勤務を変えた。連載小説「自由と正義の水たまり」は、本人の体験を下敷きにした。イクションの形でものにして、一篇だが、「お前は、小説よりも体験の方が面白い」といわれるほど、ちょっと常人は眞似のできない体験が豊富だ。7月号からは同氏によるルポルタージュ「知らない人の神戸」（仮題）が始まる。永年、奈良の地に居住し、いわば「異邦人」の眼で見た神戸が、どう料理されるか、大いに楽しみだし、期待される。

## □ 小西 保文

（二紀会員）

素外で人間味のあるさし絵を描く小西さんは昨年三月に金山平三賞を受賞し、その受賞記念に「人間愛の造型」というタイトルで今年、三月五日から八日まで東京の光悦洞、四月六日から十一日までは仙台の藤崎デパート美術画廊で個展を開催した。見るからに暖かみの感じられる庶民的な人柄で、神戸二紀会の中でも信望が厚い。人間の存在を深く問つめること――をテーマに描き続け、現在は秋の二紀展にむけて構想を模索中。毎朝、裏山に一時間ほど登山し、ラジオ体操をして体力作りにも励んでいる。本誌主催第三回ブルーメール賞受賞。兵庫区在住。